

武蔵野日曜聖書講筵

一万タラント

——マタイ伝第18章21～35節——

1967年5月28日

小池辰雄

【マタイ18】（口語訳）

21そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟がわたしに對して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。

22イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七〇倍するまでにしなさい。23それだから、天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。24決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところへ連れられてきた。25しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。26そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。27僕の主人はあわれに思つて、彼をゆるし、その負債を免じてやった。28その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。29そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言つて頼んだ。30しかし承知せずに、その人をひっぱつて行って、借金を返すまで獄に入れた。31その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行つてそのことをのこらず主人に話した。32そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願つたからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。33わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。34そして主人は立腹して、負債全部を返してしまふまで、彼を獄吏に引きわたした。35あなたがためめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに對して、そのようになさるであらう」。

●神のドラマ

新しい方もいらつしやるようですので、初めに申しておきますが、聖書は一般に「研究会」といひまして、よく研究をします。私ももちろん研究をいたしますけれども、いわゆる研



究というような角度ではこの聖書の世界には入れない。いつも初めての方がいらつしやる
と、私は口癖のように言うんですが、聖書はドラマである。劇でありますので、創世記か
ら黙示録にいたるまで、これはイスラエルの歴史を中心とし、人類の歴史に展開して、神
の新天地を来たらしめるといふ、聖書が示すところの神の大計画です。その具体的なド
ラマチックな歴史を通して——歴史は正にドラマです。いわゆるドラマというものが人間
の歴史の中から取材してくるわけですが——そういう意味で、決して教訓の書でも、いわ
ゆる修養の書でもない。ドラマであつて、私たちは神のドラマの中に一員として——一人
びとりはその具体的な俳優なんです。そこで役を演じなければならぬところの、それか
ら外れたならば神の生命から、歴史的なドラマから外れてしまうのであつて、そういうよ
うな意味あいにおいて——我々の一生はこの神のドラマに關与するものである。この自覚
をもつて聖書に立ち向かうということが聖書に対する一番大事な本筋の態度であると思
ふのです。こんなことをいきなり言うような牧師さんはおそらくないのではないかと思
いますけれども、私はそのことが、頭ではなくて身体からだでわかつてきて、この聖書の中に自
分を投入する読み方になつたらば、日蓮の言ういわゆる

「身体で読む、身しん読とくする」

ようになりましたらば、非常にこれが受けとられてきたというわけです。

しかも、このドラマの中に入る門は、

「我は門なり」

と言われたこのキリストという門であり、この門を通らなければ、この世界に入れ
ない。そこを通るには、何か自分の聖書知識とか或いは自分の善き行為とか、とにかくこ
ちら側の何か条件をもつてきて、それで通してくださいということではない。無条件に何も
携えないで、このキリストという活ける門の前に本当に平伏して降参してかからないと、
これには入れない。こういうわけのものであります。今日のこの譬話を讀むと、それに非
常に關連してありますので、譬話の中に入っていきます。

●不可能を可能にしてやる

この譬話はマタイ伝に特別な記事でありまして、他の福音書マルコ、ルカ、ヨハネにはない。
18章21節に、

21 そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟がわたしに対

して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。

まあ仕方がないから、七回くらいは間違つたら、よろしいと言うべきかと聞いたら、

22 イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七〇

倍するまでにしなさい。

と。そういう言葉がまずあるわけです。



「七度を七十倍する」

ということとは、

「限りなく赦してやれ」

ということですよ。人間というものはなかなかこれができない。

キリストの言葉というものはみな絶対性をおびている。決して相対的なものではない。キリストは私たちに或る絶対的なものを要求しておられるので、

「こういう場合にはこうだ、ああいう場合にはああだ」

なんて、条件的なことはキリストの言葉にはない。断言的な言い方をする。それは我々に不可能なんです。我々にはできない。しかし、できないことをキリストは要求される。水を割らない。

「それでは、福音ではないじゃないか。とてもつらくてしようがない」

なんて思う。しかしながら、普通の人は、「キリストの教え」というと、何かそれが教えであるようにして、多少水を割って、

「まあ、それくらいのところはよかろう」

というような角度で、無意識のうちに受けとっているのではないか。実にどの言葉をもつてきても、キリストの言葉に無条件に及第する人はおそらくなからうと思う。それでは、何が福音かと言いたくなるわけです。喜びの音信おとずれというのは、喜びどころの騒ぎではない。我々をしめつけて土壇場まで押しつけてしまうというようなことです。しかし、キリストは、

「そのできない不可能を可能にしてやる。私のところに来なさい。私のところに来れば、その不可能を可能にしてやる。『道徳、道徳』と言うけれども、本当の道徳は、その力は、私のところに来なければ与えられないのだ」

というのがこの福音なんです。

ユダヤの律法の世界は——モーセに示された十誡からたくさん律法ができましたが——はんぶんじょくれい繁文縟礼で、ユダヤ人は相変わらずそれをやっている。一生懸命で守ろうとする。一年と同じ数の三六五あるそうですが。しかし、キリストは、

「そんな戒律をいくら外側からたとえ守ったところで、本当に守ったというものはないよ」

と。神さまの律法というものは、そういった外側から守るのでなくて、内側から自分で、本当に止むにやまれずして満たすような満たし方が本当の守りというものだということをもつて示されたわけですよ。だから、その実力をもっているキリストのところに行かなければ、実力は来ないんです。

そうすると普通、青年諸君は、

「我々はこれだけの力を与えられているのに、そんなに無条件にお返ししてしまつたのでは、何だか生きがいが無いではないか」



と、大体思うわけです。無理もない。そういつた相対的なものは決してそれ自体わるくはない。けれども、キリストは、

「まずそれを問題とするな。そうしたら、与えられたものは今度は限りなく展開していくぞ」

ということをおうとして言っているわけなんです。

●無条件にゆるす

人を赦すということがなかなか私たちにはできない。すぐ何だかんだとケチをつけて、けなすわけです。ところが、キリストは、

「無条件にゆるせ、七たびを七十倍してゆるせ」

と言われる。その後で、

²³それだから、天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。

と。「それだから」と言いまして、そこにもってきたのは、多少そのところに飛躍もないことはないけれども、しかし、質的には同じものがでてくる。王が僕たちと決算をする。

²⁴決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。

これは実は大変な負債です。「タラント」は六千デナリといって、「デナリ」の六千倍です。一デナリというのは昔の計算でいうと大体三十五銭になる。昔の三十五銭というところの何円になるかね。今でいったら、三千円くらいにはなるのではないかな。その三十五銭が一デナリで、一タラントが六千デナリで、一万タラントはそれの一万倍ですから、二千万円になる。三十五銭を一デナリとして一万タラントを計算すると、二千万円になる。昔の数で二千万円ですよ。今だったら、どういうことになりますか。何百億円ということでしょう。だから、この譬話はあまりにもひどすぎるなど。ソロモンの年収が「六百六十六タラント」ということが列王記略上10章に出ている。

ソロモンというのは昔の一番金持ちの王さまです。サウロ、ダビデ、ソロモンという。

「ソロモンの栄華は素晴らしい栄華だが、その栄華もこの花の一つに如かない」

とキリストが言われた。人工の美がどんなに素晴らしくても、野の一つの花の美の方が上だよとキリストが言われた。

ソロモンの一年の収入が六百六十六タラントとすると、一万タラントというのは大変なこと、そんな負債があるものかと、理屈からいえばそういうことになる。王さまにそんな負債をした者があるか。いや実は王国の公金を横領して使ったのだからと、学者はいろんなことを想像するわけです。どんな想像でもいいですが、要するに、とてつもない莫大な金の負債である。それが王のところに連れられてきた。そして、返せと言われた。

²⁵しかし、返せなかったので、主人は、



「このところに「主人は」ときているでしょ。「王」という言葉を今度は「主人」と言った。このところで学者というのはすぐ考えるんだ、「王」と言いながらいきなり「主人」と「僕」ということはどういうことかと。もともとこの話は何か筋が二つあったのがくっついてしまったのではないかとか、いろんなことを言うわけです。まあ、それはどうでもいいですが、もともと「主人」という言葉だったらしいですよ。それを「王」と言った。というのは、「王」というところはギリシア語をみると、「人なる王」「アントローポス・マカリオイ」と書いてある。「メレック」という字と「アダム」という字がくっついたような言葉になっている。要するに、主人は、

その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。

昔は奥さんも子どもも、ある意味において物件のように取り扱われた場合がユダヤではあったので、それをみんな売って返せというようなことです。「売る」ということは奴隷にしてしまえということ。

²⁶そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。

と。もちろん、全部返すなんてことはとてもできないことですが、非常に低姿勢でこう言った。しかし、それはとにかく真心をもって言ったというわけで、

²⁷僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。

完全に一万タラントは棒引きにしてくれた。一万タラントという驚くべき数を、

「よし、もう無条件にお前をゆるすから」と言っ

と言って、その負債を免じてやったわけです。

²⁸その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、

「百デナリ」というとケタちがいの小さなものです。一デナリは三十五銭ですから、三十五円だね。とるにたらないお金を負債している者にでつくわして、

彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。²⁹そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってください。返すから』と言って頼んだ。³⁰しかし承知せずに、

その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。³¹その人の仲間た

ちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人

に話した。

王さまに告げた。

「あなたにこんなに一万タラントをゆるしてもらったくせに、百デナリを借金した者をゆるさないで縛りあげてしまった。とんでもないやつです」

というわけです。

³²そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。³³わたしがあわれんでやったように、



あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。34そして主人は立腹して、負債全部を返してしまいうまで、彼を獄吏に引きわたした。35あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであらう」。

と、キリストはそういう譬話を言われた。この筋は非常に簡単明瞭であります。

●自己中心

私たちは実は神さまの前に——もう私も60歳を過ぎてきましたが、省みれば惨憺たる生涯であります——躓いたり、転んだり、滑ったりというようなわけです。もし、間違いを数えたてたら、とうてい「一万タラント」どころの騒ぎではない。我々人間の生活における罪というのは、なるほどそういったものを数えてみたって、それは五十歩百歩なんです。実は、そういった間違いとは一体何かというと、神さまに対する態度がそもそも大きな間違いをやっている。自分のまわりをすべてのものが回転していると思っっている。「思っっている」と言っただって、それは思わないこともあるかもしれないが、要するに、無意識的にも自分が中心で動いているというのが、人間の生まれつきの自分というものです。自己中心です。即ち、地球が中心であつて、星や太陽がグルグル回っている。大地はじつとしていて他の天体が動いていると、昔の人はそう思つた。プロレマイオス天文学というのはそうでしょう。ところが、コペルニクスが現れて、これが地動説を称えた。太陽の回りを私たちの星は動いて回っているんだと。即ち、コペルニクスの転回と云つて、太陽が中心で、我々は、地は動く。

自分が実は中心ではなかった。自分は何ものかに実はひっぱり回されていた。このこと分かるまではダメなんです。即ち、

「自分が中心だ」

と意識あるいは無意識に思っっている、その事態が「罪」ということです。これはもう東西の偉大な宗教家はみなそのことを体験して、それから抜け出ることをやっている。

私たちは魂があるが、この魂の神さまとの結びつきが切れてしまつて、自分という魂が中心であるかの如くに思っっているところに罪があつた。だから、神さまに対する態度が全然、主従が逆になつていて、いや実に傍若無神というような、傍らに神が無きが如くに動いているというのが私たちである。この罪という事態がいろいろな罪派的な派生の事態を及ぼしているわけです。

生まれつきの自己弁護というやつで、自分を弁護するというのが人間の元来の姿である。己を義よしとしている。キリストの最大の弟子であるパウロが初めそれであつた。己を義よしとしていた。そして、

「神の前に責むべきところなし」



と言って大いに威張っていた。

「不義を天地に恥じず」

と孔子の言葉にある。正に、このパウロは「不義を天地に恥じず」式に自分を思っていた。いや、その照準は実は間違っていた。

何一つとして私たちは自分で本来持っているものなんてありはしない。親から社会からいろいろなものから受け継いでいる。その根源はどこかというところ、我々の存在の根源は、我々がこれを端倪たんげいすることのできない何ものか、霊的実在によってある。

心があるということは既に宗教人であるということです。魂があるということは既に宗教人である。しからば、その魂がみんな問題をもっている。その問題を本当に問題なき世界に突き抜けるためには、どうしても我々の魂の一番根源のものにスイッチが切り替えられるまでは、開けられるまでは、どうにもならないように正直できている。この事実もごまかすわけにいきません。

仏教的な角度からいうと、宇宙の何か大霊といったようなものに悟り澄ましていく。そして、自分の魂に実に仏法がある。そのことに気がつく、そういう悟りの方から行くいき方もあります。魂に仏性がある。

「山川草木ごとごとく仏性あり。衆生悉くこれ仏なり」

という、そういうすべてを貫いている何ものか。そのことを悟ることは決して自分が中心ということではないですよ、やはりその悟りにしたところで。ただわがうちに、ある絶対的なものが映っているということに気がつくことです。

●結び返し

キリストはヨハネ伝の中で我々に、

「汝らは神の子らである。お前たちは神々であるぞ」

とまで言ってしまうところがある。神々である。即ち、

「一人びとりは神の子らである」

ということですよ。そのことは本来そうなんです。けれども、その実質を失っている。その実質をとり戻そうとしたって、それはできない。それをとり戻すためには、どうしても新しく結び返しをしなければならぬ。その結び返しが宗教である。「宗教」という言葉が即ち、「結び返し」ということですから。この結び返しを私たちがする。今の若い方がどうしてもこのことに気がついていただきたいわけなんです。

学校の教育というものはこの根本問題までこないものだから、小学校から大学まで教育を受けましてもどうにもならぬ。教会とか集会とかがあるゆえんのは、正に学校で与えることのできないものを牧師さんたちが何とかして与えようとするのが、それぞれの教会、集会の使命である。私は学校でも相当率直に、私に接する学生には教場だってお構いなし



に言います。学生はあるところまでは喜んで聞くけれども、その先に飛び込もうとしない。私は非常にそのことを残念に思う。なにか宗教の世界に入ると、色がつくかと思うんだね。そして、何か見解が狭くなるかと思う。そんなクリスチャンがいるものだから、困りますけれども。宗教の世界は実は無色透明の、本当に深くまた広く高く、何とも言えない世界ですよ。どんな文化的な仕事、何をなさった方がいい。その根底にこれがあるなら、本当の展開を始めますから。私ははつきり言っておきます。

どうぞ、何をなさるにしても——御利益ごりやくではないですよ、宗教に御利益宗教もあるかもしれないが、私は御利益で言っているのではない——神の実力が、神の栄光が本当にその人を通して自ずから、また止むに止まれずして現れていく。そこに人生の生き方というものがある。なにも典型的に全体主義的になるのではない。一人びとりの顔は、全世界を探したってそれと同じ顔の人はいない。そのように一人びとり、使命づけられているものはみな、ある一つの絶対性がある。あなた方の顔はみな絶対的な顔だ。そこらの蟻や何かは同じ顔をしているかなんか知らんけれども、人間は絶対です。羊あたりでも、本当の羊飼いは羊が何匹いても、その顔を見分けるようだ。素晴らしいことだと思います。私なんかは、生徒の名前をすぐ忘れてしまったりして、まことに申し訳ないんですが。一人びとりの顔を見ても、それは似た顔はあるかもしれないけれども、本当に等しい顔というものはない。一人びとりが神さまから、ある絶対的なものを——同じく目は二つで鼻は一つで口は一つなんだけれども——一人びとりが絶対的な顔の質を持っている。いわんや、魂をもった存在はそれぞれ使命を、その人でなければならぬ絶対的なものを一生涯かかって持っているんです。イエスが、

「全世界とも一人の存在は比較することができない」

と言われた。こういう真理がわかってこない、いわゆる平板な論理では出てこないんです。こういうことは。いわゆる頭のいい学生がとかく信仰の世界に入れないうのは、比較研究ばかりやっているからです。微にいり細にいり分析総合ばかりやっている。しかし、私みたいな単細胞みたいな簡単なやつは絶対の世界にグーツと入れるようなわけです。それで私は福音の世界に入ったら、今度は単細胞が無限細胞になっていく。これが無限に展開する。何を讀みましても、それぞれに対する本当の位置づけというものが知らぬまにできてくる。そして、本当に公正にもものを見ていくようになっていく。これは神の光、無色透明の光で、太陽の光よりも素晴らしい光で、花の色と色彩と姿とが——これは蛍光灯ではダメなんだ——みんな正しく見えてくる。どうぞ、福音というものが、色づけのない、一切のものに対して逆に色をつけることのできる、その一切を認識することもできれば伸ばすこともできるといふ、そういう素晴らしいものだということをお頭からひとつ受けとつていただきたい。それから始まるんです。



● 十字架を突破しての聖霊の事態

キリストという人が無条件に赦す。無条件に赦すということは、彼が無条件に赦す実力をもっているからなんです。私たちはちよつと一時は無条件にゆるしたって、それは本当の無条件ではないんですよね。

私は D 大学の演劇部の部長を兼ねている。演劇のことは誠に私はよく知らない男でございますが。O 君が演劇部の学生の方の部長で、一生懸命をやっている。先日、イプセンの「幽霊」という素晴らしい劇をやって大成功を博した。私はもちろんそれに行くつもりであったが、演劇部の人が誰も私に連絡をしないから——いろいろ忙しいことはよくわかっているし、O 君も一生懸命にやっていることもよくわかっているんだけれども——私はちよつとつむじを曲げて行かなかった。これはその学生諸君に一つの筋をはつきり通すために、私は非常に行きたかったけれども、残念ながら行かなかったという、一つの義の面をはつきりあらわした。けれども、私はもちろん O 君が謝りにくくと思っていた。無条件に私は赦します。私はこの福音の角度で——福音は義と愛とがキリストにおいて本当にはつきりしている——何も私はキリストのまねをするのではない。この福音の世界は、「ゆるし」と言いますが、その無条件のゆるしがただ手放しの無条件ではなかった。神さまが私たちの罪、自我という罪を砕くためには、赦すためには、大慈大悲としてただ赦さない。

神の子キリストが——義を、神の御意を完全に体现したところのキリスト——即ち本当のただ一人の義人である。

「義人なし一人だになし」

という。自分の義を誇っていたパウロが、

「とんでもなかった。そんな自分の義なんでもものは塵芥の如く思う」

と彼は吐き棄てるように言っている。

ただイエス・キリストの義、それがあの十字架に現れた。神の義が貫かれた。あのキリストの義を、義なるキリストを、そのまま私たちにくれる。同時にそれは罪の絶対的な赦しであり、

「お前の罪は全部、私がひき受けた」

というのがキリストの十字架です。キリストの十字架のこの贖罪によって私たちは完全に引き受けられてある。

「大死一番」なんて言ったって、私たちにできるものではない。十字架において大死一番されてある義人に本当に気がついたら、もう十字架の前につぶ倒れるだけです。それがパウロが、

「われキリストと共に十字架せられたり」

と言った、あの有名なガラテヤ書の言葉です。無条件に赦すためには、キリストは無条件に私たちの一切の罪を負って、神さまの前に無条件に自分を十字架してしまつた。



それで、逆説的な言葉で、キリストが、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給うか」

と言われた。キリストは棄てられる人ではないんですよ。

「十字架されてしまったんだ、私はお前たちの代わりに。もう、神さまはお前たちの罪を見ない。この十字架でお前たちの罪を見ているんだよ」

と。だから、私たちは無罪放免である。義が貫かれ、また愛が貫かれた。この義を私たちに賜る、この愛を賜るといのが十字架を突破しての聖霊の事態なんです。

罪の赦しというものはパウロが別なところで言っているとおり、

「この甦りは我らを義とせんがための甦りである」

と言った。即ち、

「義とせんがため」

ということとは

「義を与えんがため」

ということですよ。これは観念的に義とするなんていうことではない。観念的に私たちがただ義と認められて何になりますか。私たちの中に義の本質が入ってこなければ。この義の本質、この愛の本質、実体、これがキリストの霊、神の霊であります。甦った霊体のキリストが、

「さあ、祈って待っている。そうしたら、やがてお前たちの中に今度は入っていくぞ。

今まで一緒にご飯を食べたりしたが、しかし、それでも私はお前たちと一つになれなかった。共にあったかもしれないけれども、一つになれなかった。今度は一つになる。お前たちの中に入って一つになるぞ」

と。この

「一つにならんがために」

ということがさんざんヨハネ伝の17章あたりで語られている。クリスチャンがこの「一つになる」という深い福音的神秘を受けなくてはいかん。

「神秘」というようなことを言う——「神秘」「ミステリオン」というのは「奥義」と言っただけいい——すぐ、特にプロテスタントの人たちは警戒して、

「神秘主義はあぶない」

と言う。何を言っているか。空気は吸えば血がきれいになるとわかって、私たちは生きていますか。空気が私たちの中に肺を通って入って血の中に溶け込んでこそ、生きているのではないですか。イエス・キリストの御霊の生命を我々の魂の中に溶け込ませないで、何が聖霊かと。

「御霊を宿みたましている者でなければ、キリスト者ではない」

とパウロが言った。パウロは、聖霊でバプテスマを受けてひっくり返されてしまって、参



つてしまった。それで初めて、

「わが目より鱗のごときもの落ちたり」

ということになった。ヨハネもペテロもヤコブもみんなそうです。その前はなかなか良かったようにみえるけれども、みんなダメなんだ。ところが、聖霊のバプテスマを受けてから、それがみんな本ものになった。もうはつきりしているんですよ。こんなに聖書ではつきりしていることをなぜ今のキリスト教界が一般に、ただ文字づらのことばかりやっているか。本当の権威はこの御言みことばを御霊の力をもって、御霊の実質をもって読む人が本当の権威を持っている。あなた方一人びとりが、どんな乙女であろうとも、大神学者よりも権威を持つことができるんですよ。

キリストが無条件に私たちを赦すことができたのは、無条件に彼はこの義を、神さまの義を貫いて、そして十字架を自ら背負ってしまって、罪を断罪されたことを受けたからこそ、十字架をもって本当に罪を赦す実力を持っているからこそ、無条件に赦した。

●無限タラントを与えるぞ

私たちの生活というものは、ある一つの厳かなものが動いている。そして、それは大きな喜びを約束されている。私はD大学であろうとT大学であろうと、とにかく教えた生徒は、本当に心からその魂を愛している。なんとかして、誰かが本当にこの福音をつかんでもらいたいと思っている。

「なるほど、小池という変わった先生がいたが、あれは本ものだった」

ということを後で本当に気がついて、一人二人三人と、本ものをつくっていただきたいと思う。ウソものが幾人いたってダメですよ。神の国は本ものによつて伝わっていく世界です。

本ものが現れると迫害する。私も今とにかく、大体の教会や無教会の方から少し変わりのように思われている。パウロが「異端の首かしら」なんて言われた。いいですよ、何と言われたって。私はキリストに、

「お前は本ものだ」

と言われれば、もうあとのことはどうでもいい。

「お前自身はダメだな、あいかわらず。だけれども、お前の中には本ものが来てい
るぞ」

と。それでいい。私はキリストの本願で生きているのであって、

「現実の私がどうであるかである」

と言って、品定めなさる方はどうぞ、もつと偉い先生のところに行ってください。私みたいなカスのところにいる必要はないから。けれども、私の中にいるキリストの本願の事態。これは世界中の誰が何と言おうとも、びくともしないで私は動いていきます。



イエス・キリストはそのような驚くべき「一万タラント」なんていう大借財をもってきて、これを無条件にゆるす。

「お前たちの罪は一万タラント以上の罪なんだ。それを私は完全に引き受けてしまった。そして、私の中にある無限タラントを与えるぞ」

と。私たちは無限タラントのキリストの霊の生命をいただいたら、あなた方は今二十代の青年諸君がこの真理を、この生命をつかまえて生涯をつつ走ってごらん。本当に輝かしい人生航路を進んで行くことができる。その無限タラントを与える。一万タラントに代えて無限タラントをくださる。借金を棒引きにして——棒引きにただけではないですよ、ゼロになっただけではない——今度は無限のものを与えようという。キリストは、

「無限タラントをやる」

とまでは、この譬話でお話しになさっていないけれども、私たちには聖霊によつてそう響いてくる。

かくも赦された者が、人間関係において下らないことを言つて、人をどうのこうのなんて言っているうちは、

「お前は無条件に赦されたのに、なにごとだ」

と、今度は逆に地獄に落とされてしまうよな。即ち

「牢屋の中に閉じ込められてしまふ」

とは地獄です。魂の地獄の中に入れられてしまつて、これはお終いですわ。

私たちの赦されたということは、赦されただけではない。赦されて今度は与えられる。キリストは私たちにキリスト自身を与えたもう。復活のキリストを、聖霊のキリストを与えたもうから、これはもはやタラントをもつて数えることのできない無限タラントの霊的な宝であります。パウロが、

「この土の器の中にこの宝を^もつたら、他のものをもつて代えることができようか」

というようなことをコリント後書4章で言っているでしょ。

「⁷我等この宝を土の器に有てり、これ優^{すぐ}れて大なる能力^{ちから}の我等より出でずして神より出づることの顕れんためなり」(コリント後4:7)

と。どうぞ、精神的に行き詰まったり、あるいは肉体的にどうかかなりましても、このキリストを本当に祈りの世界で受けとることです。祈りの世界で受けとるということは自分の中に投げかけてください。これが祈りなんです。祈りの秘訣です。そうしたら、そこから本当に力が湧いてくる。精神的なものであろうと、肉体的なものであろうと、そこから本当に力が湧いてくる。

また、その人がそう言ったことがもしてできないような状態だったら、どうぞ、その人に



本当に祈って手を置いて、手を通して——これが「按手」ということ——聖霊を伝えてあげてください。力が入りますから。按手ということは本当に祈りの世界で、もうしばしば私を通して神さまは人をお助けになりました。

●使徒的信仰

いわゆる無教会信仰にいたときには、私はそんなことは一つもできなかった。また、無教会にはそういうことが起きない。

「無教会信仰は形式でなくて、信仰のみの信仰である」

なんてやっている。それは悪くはない。けれども、その信仰が自分の信仰で、ただキリストの十字架の贖罪という命題だけを信じたって、それはダメです。これは答案は同じであっても、実質が違うんです。

内村鑑三先生が聖霊の宣教師にでつくわして、驚かれた。無教会の一番の親玉の内村鑑三先生が驚いて感嘆された。

「ああ、私もそうだ」

と言ったのではなかった。驚かれたということ、やはり無教会にある一つの限界があったことを示している。私は何も内村先生にケチつけているのではない。内村先生はもちろん神の器で大事な役割を果たして行かれた。もちろん聖霊の器でもあられた。けれども、どうも歴史的に言いまして、それから後は事実、その展開がなされていない。展開とは、先生を乗り越えて進んでいくことです。私の先生の藤井武先生は内村鑑三の葬式の時に、

「今こそこの屍を乗り越えて進む」

と言った。しかし、それからもう三、四か月でこの藤井先生も仆れてしまった。私は藤井先生を乗り越えて進みつつあるつもりでございませう。「藤井先生」というと、無条件にただ奉っているのがあるけれども、そういうことではない。私はケチをつけて言うのではない。藤井先生はもちろん立派な方で、私は限りなく尊敬しております。けれども、この使徒的信仰の世界は、これでいいなんていうところはないんですから。

どうぞ、今度は私を乗り越えて、あなた方はどしどし進んでください。まだ、小池なんというのは大したことないですからね、正直。次から次へと本当に身体のバトントッチをして、

「なるほど日本には本当の福音が展開を始めているな」

ということを世界に証していかななくては。「大和魂」という言葉は、私はその点で好きなんだ。世界に大和を、キリストの大和をもたらししていく。もはや宗派根性ではない。どのようなところにおいても結構です。誠にキリストを受けとっていくなら、すべてが本当に兄弟姉妹である。ベートーベンが言ったとおり、

「幾百万の人たちよ相抱け。星の幕屋のかなたには愛の神が住みたまつ」



と、シラー、ベートーベンの第九シンフォニーというのはそのことを歌っているではないか。まだシラーもこの聖霊のことはわかっていない。シラーがもう少し生きていたら、どうなつたか知らんけれども。今度の「ルターとシラー」というのを読んでください。面白く読むことができると思います。

皆さんはもうなんだかムズムズしてしまうでしょ。なんと自分たちの将来は大きな抱負を約束されているか。

「よし、一生涯をかけてひとつ何か本当にしでかしてやるぞ」

と。「しでかしてやる」と言つたつて、自分がしでかすのではない。キリストが推進力をもつてしでかしてくださるから。頭が良いの悪いのなんてことは気にすることはいいですから。

「^{みたま}御霊の行動力、知恵というものは限りなく進んでいく。神の奥義までも究め

る」

とパウロが言っているではないですか。

もはや、兄弟を赦すの赦さないのなんていう、小さなことはもう通り越してしまふような魂になります。そして、私たちは無条件にキリストに赦された者であるから、無条件に本当に人を赦していくことができる。この神の法則。義は通すが、しかし、義にこだわることではない。こだわった義は義ではないですよ。完全にそれを乗り越えて進んでいく。そこに本当に美わしいこの福音の構造がある。

「汝らは地の塩なり」

というのは、これは義の世界。

「汝らは世の光なり」

というのは愛の世界です。地の塩であり世の光である。汝らはキリストの義者である。またキリストの愛の者である。愛は一切を覆う。

この「一万タラント」は実は、一万タラントの奥に「無限タラント」という文字を皆さんには本当は読んでいただきたいわけです。では、おしまい。

